

## 精神薄弱養護学校児童生徒にかかわる性教育に関する調査研究

—— 保護者へのアンケート調査による ——

板谷 安希子\*・矢口 かおり\*\*・尾崎 久記\*\*\*・鈴木 宏哉\*\*\*\*

(1997年4月28日受理)

Sex-Related Education at Home and at School for Children with Mental Retardation :  
Analysis of Answers on the Questionnaires to the Protectors

Akiko ITAYA, Kaori YAGUCHI, Hisaki OZAKI and Hiroya SUZUKI

キーワード；性教育，精神薄弱児，精神薄弱養護学校，アンケート調査，保護者

身体発育にともなう身体的・精神的変化は、個々の子どもにとって重要な意味を持っている。知的側面の知識や理解に制約がある精神遅滞児においても、身辺自立から思春期を経て学校生活終了後までを見通した性教育をどのように企画するかは重要な課題と言えるだろう。本研究では、養護学校小学部、中学部、高等部に在籍する児童生徒の保護者645名を対象として、彼らが子どもの性にかかわる指導をどのように受け止め、学校に対していかなる内容の指導を希望しているかをアンケート調査により検討した。その結果、家庭においては、身辺自立や社会性に関する事項は非常に高い割合で指導をおこなっているが、その他の事項については具体的な取り組みはあまり見られなかった。一方、学校に対する希望は特定の項目に集中することなく、どの項目についても一定程度指導することを望んでいた。とりわけ、家庭ではほとんど回答がなかった性や心理面に関する事項についても学校での指導を希望していることが認められた。さらに、各項目について学年進行にともなう増減傾向を調べたところ、身辺自立に関わる事項は家庭・学校とも学年進行にともない低下していた。これに対して、「異性へのあこがれ」や「男女交際のマナー」などについては学年進行にともない増加しており、思春期が近くなるにつれて保護者の関心も変容していくことがうかがえた。

\* 県立内原養護学校 (Uchihara Prefectural School for Children with Handicape), \*\* 県立土浦養護学校 (Tsuchiura Prefectural School for Children with Handicap), \*\*\* 茨城大学教育学部 (Faculty of Education, Ibaraki University), \*\*\*\* 長野大学 (Nagano College)

はじめに

知的障害の有無にかかわらず、身体発育にともなう生じる身体的・精神的变化は一人ひとりの子どもにとって重要な意味をもっている。知的側面の知識や理解に制約がある精神遅滞児においても、排泄や身体の衛生保全などの身辺自立に関わる指導は、早い時期から避けられない重要な事項である。また、思春期にともなう身体的変化の理解・受容に際しても然るべき指導の手だてが必要とされる。知的な面での発達が遅れていても年齢相応に性的諸側面は発達しており、近年、彼らに対する性教育の重要性が指摘されてきている(大井ら, 1990)。このような潮流を背景として、精神薄弱児教育における性教育の実態も少しずつ明らかになってきている(井上, 1994)。すなわち性教育については全国の精神薄弱養護学校のうち90%近くで取り組まれているが、系統的な指導形態や指導内容を実施している学校は極めて限られている。このような状況の背景として、性教育の必要性は認識されてはいるが、その指導の方向性や内容について教員相互の共通理解がはかりにくい点が予想される。一方では、多様な実態の児童生徒に対して他に教えていくべき内容が多すぎるあまり、性教育まで手が回らないという実情も作用していると思われる。しかし、思春期における第二次性徴はもとより、学校生活を終えたあとの長い期間を見越した時、学校教育段階において性教育をどのように企画するかは、重要な課題と言えよう。その際、これらの児童生徒と日常密接に関わっている保護者の意向は十分に考慮される必要があるが、そのような保護者がこれらの点についてのどのように受け止めているのかについての報告はほとんど見当たらない。本研究は、精神遅滞児の保護者を対象として、家庭での性教育における取り組みを調査するとともに、学校に対していかなる内容の指導を期待しているかを明らかにすることによって、今後の精神遅滞児教育における性教育の在り方への一助としたい。

方 法

(1) 調査対象

1994年11月にA県内の精神薄弱養護学校に在籍する小学部・中学部・高等部の児童生徒全員の保護者を対象にアンケート調査を実施した。771名の保護者から回答を得、回答率は46.9%であった。このうち一部の回答には、家庭における指導のみもしくは学校での指導希望についてのみの回答なども含まれていた。そのため、以後のデータ整理においては、両方の事項について回答が得られたものについて検討の対象とした。本研究で検討の対象とした645名の保護者の児童生徒が在籍する学年を表1に示す。

表1 検討の対象にした学年別児童生徒の保護者数

学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	合計
人数	64	42	38	40	33	41	53	45	59	81	83	66	645

## (2) 調査方法

調査実施にあたっては、各学校を訪問して性教育の取り組み方、その指導内容状況をうかがうとともに、保護者へのアンケート配布と回収についての協力を依頼した。

## (3) 調査内容

アンケートは、①家庭での指導内容について、②学校へ希望する指導内容について、③該当児の性教育に対する保護者の考えについて、から構成される。①と②とも同じ質問項目で計27項目からなる。保護者には、予め記入された項目のうち、該当すると思われる事項に印をつけて回答してもらった。なお、「初経」、「月経」、「精通」、「マスターベーション」の4項目については、該当児童生徒の性別によって意味が異なるので、本研究での統計処理からは除外した。また③については保護者の性教育に関する考えを自由に記述してもらった。

## (4) 調査結果の統計処理

23の調査項目を以下の1)から5)までのカテゴリーに分類した。

- 1) 成長 (4項目)：「私たちの誕生」、「身体の変化」、「身体の成長」、「身体の男女差」
- 2) 性関連 (6項目)：「性交行動」、「避妊」、「性の病気」、「性のいたずら」、  
「性的被害の防止」、「性的問題行動」
- 3) 身辺自立 (5項目)：「衣服の着脱」、「手洗い・嗽」、「トイレの使用法」、「身体の清潔」、  
「下着の清潔」
- 4) 心理面 (2項目)：「思春期の心」、「異性への憧れ」
- 5) 社会性 (6項目)：「性役割」、「結婚と家族」、「男女交際マナー」、「男・女らしさ」、  
「公共的態度」、「身だしなみ」

各項目について得られた「家庭における指導」と「学校での指導希望」に関する結果を該当児童生徒の学年毎に整理し、家庭に関する結果と学校に関する結果についてマクニマーの検定をおこなった。また、該当児童生徒の学年により回答数が異なる質問項目について傾向検定を実施した。

## 結果ならびに考察

### (1) 家庭での留意事項と学校での指導が期待されている事項

本調査結果について、学年の如何を問わず単純集計した結果が図1である。この図から、家庭においては「身辺自立」や「社会性」に関わる特定の項目が極端に高い値となっており、これらの項目については家庭でもかなり留意していることがうかがえる。とりわけ、身辺自立に関する「衣服の着脱」、「手洗い・嗽」、「トイレの使用法」、「身体の清潔」、「下着の清潔」はいずれも80%を超えており、これら生活上基本的と思われる事項については、積極的に大半の家庭でも取り組まれていることが分かった。また、社会性に関する「公共的態度」、「身だしなみ」の2項目が50%を超えており、社会生活における基本的なマナーを身につけることを家庭でもかなり意識していることがうかがえる。その他、直接「性」に関わる事項や「心理面」に即した項目については極めて

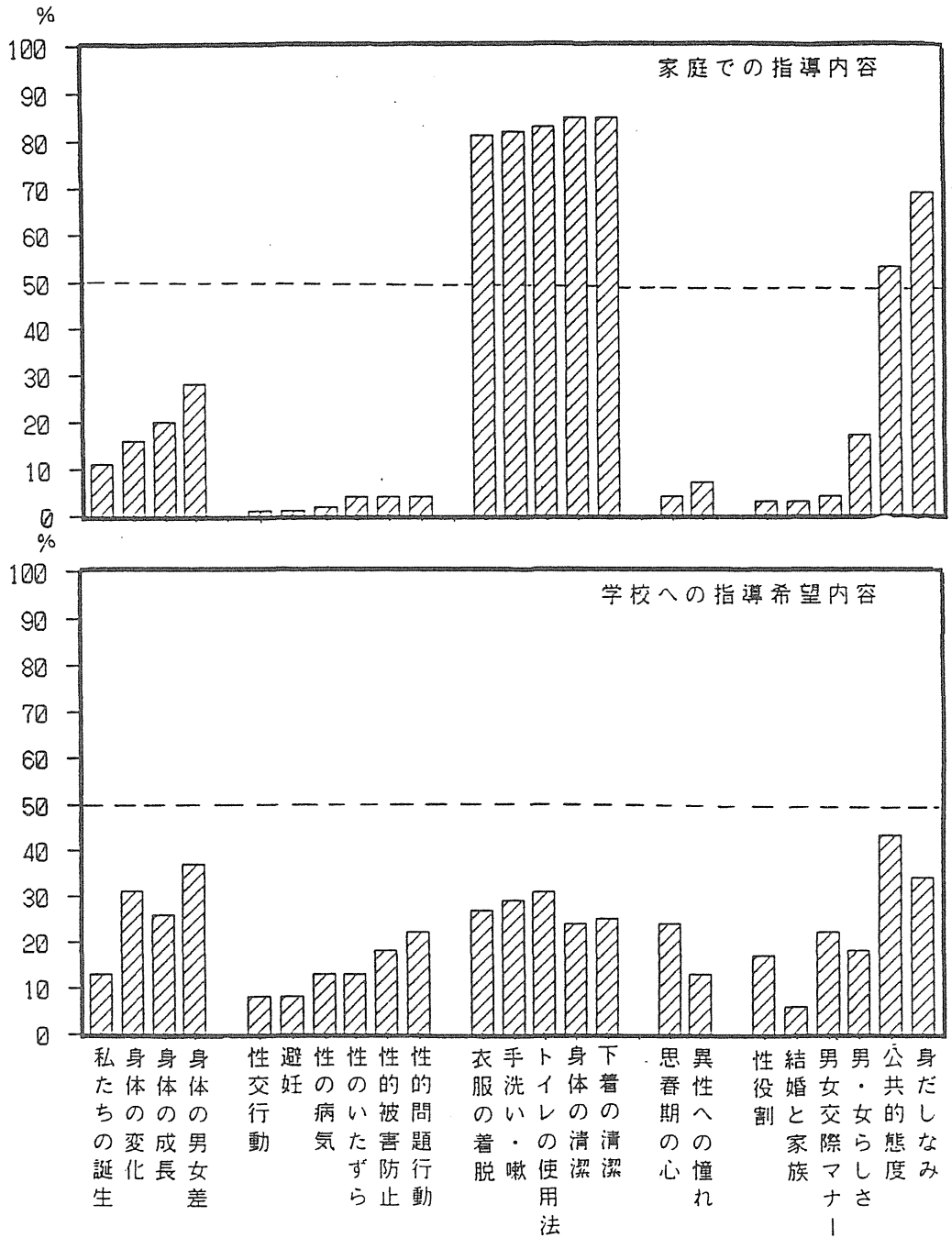


図1 各質問項目の平均回答率

低い値となっており、「身体」に関する事項がやや高くなっていった。

一方、学校への指導希望内容としては、極端に高い値を示した項目はなく、いずれの項目についても一定程度希望していることが分かる。家庭での指導内容で高い値を示した「身辺自立」や「社会性」に関する事項は、学校に対する希望でもやや高い値となっており、これらの事項は、保護者にとって最も関心の高い項目と言えよう。しかし、家庭ではほとんどとりくまれていない「性」や「心理面」については、「性交行動」、「避妊」、「性の病気」、「思春期の心」などの事項の家庭での指導は5%以下であったのが、学校での指導を希望しているのは10~30%となっていた。これは、「性」や「心理面」に関する事項については、指導が必要であると一定程度の保護者は考えているが、具体的に指導するには至らず、学校へそれを期待しているのではないだろうか。

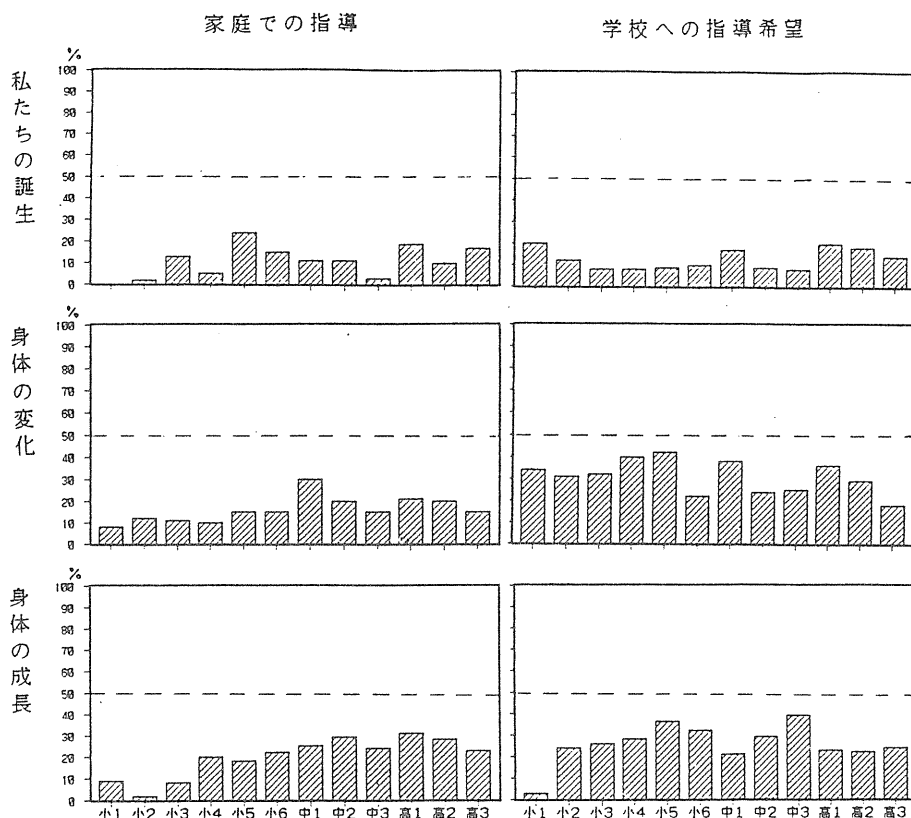


図2 学年によって傾向が認められた項目に関する学年別回答率（成長に関する項目）

## (2) 学年進行にともなう保護者の意識の変化

本研究は、小学部1年から高等部3年までの12学年にわたる児童生徒の保護者を対象としたアンケート調査である。調査項目も性に直接関わる事項から身辺自立や社会性などまで多岐にわたっているため、児童生徒の在籍する学年の如何にかかわらず保護者の回答状況が類似している項目が認められた。その一方で、在籍学年の如何によって一定の傾向が見出された項目も多くあった(表2)。これらのデータについて傾向検定をおこなった結果、家庭・学校に共通して在籍学年の如何による

違いが見出せなかった項目としては、「身体の男女差」、「性交行動」、「避妊」、「性のいたずら」、「性的問題行動」、「身体の清潔」の6項目である。これに対して、家庭と学校のいずれについても学年進行にともない傾向のある変化は、身辺自立に関して3項目、心理面で1項目、社会性について1項目あった。このうち、身辺自立に関する「衣服の着脱」、「手洗い・嗽」、「トイレの使用法」(図5)は、家庭と学校のいずれとも学年進行にともない減少する傾向を示した。身辺自立の基本であるこれらの事項についての問題が、学年進行とともに軽減されていくことが読み取れる。これに対して、心理面に関係している「異性への憧れ」(図4)や社会性に関する「男女交際マナー」(図6)の項目は、家庭・学校いずれも学年進行にともない増加する傾向となっており、思春期にさしかかると保護者もこれらの項目を次第に意識してくることが分かる。

また、社会性に関する「公共的態度」(図6)は、学年進行にともない家庭では増加するのに対して、学校への希望はやや減少しており、この項目については学年進行とともに学校から家庭へと保護者が次第にスタンスを移していることが予想される。

また学年進行にともない家庭でのみ変化する項目としては、成長に関する「私たちの誕生」、「身体の変化」、「身体の成長」(図2)と、性に関する「性の病気」、「性的被害の防止」(図3)であり、いずれも学年進行と

ともに増加傾向を示していた。しかし、「性の病気」、「性的被害の防止」に関する家庭での回答率はいずれの学年とも極めて低い。これらの項目については学校での指導を希望している割合がいずれの学年とも一定程度存在し、早い時機から学校での指導を期待している点が注目される。

一方、学年進行にともない学校への希望が変化したのは、身辺自立に関する「下着の清潔」の項目と社会性に関する「性役割」および「結婚と家族」に関する項目である。このうち「下着の清潔」の項目は家庭ではいずれの学年とも一貫して高い値となっていたが、学校に対する希望については学年進行とともに減少していた(図5)。これに対して、「性役割」と「結婚と家族」の項目については、家庭においてはいずれの学年とも極めて低い値であったのに対して、学校への希望では学年進行とともに上昇していた(図6)。

表2 学年進行にともなう傾向検定の結果

	選択肢	家庭での指導	学校への希望
成長	私たちの誕生	**	
	身体の変化	*	
	身体の成長	**	
	身体の男女差		
性	性交行動		
	避妊		
	性の病気	**	
	性のいたずら		
	性的被害の防止	**	
	性的問題行動		
身辺自立	衣服の着脱	**	**
	手洗い・嗽	**	**
	トイレの使用法	**	**
	身体の清潔		
	下着の清潔		*
心理	思春期の心	**	
	異性への憧れ	**	**
社会	性役割		**
	結婚と家族		**
	男女交際マナー	**	**
	男・女らしさ	**	
	公共的態度	**	*
	身だしなみ	**	

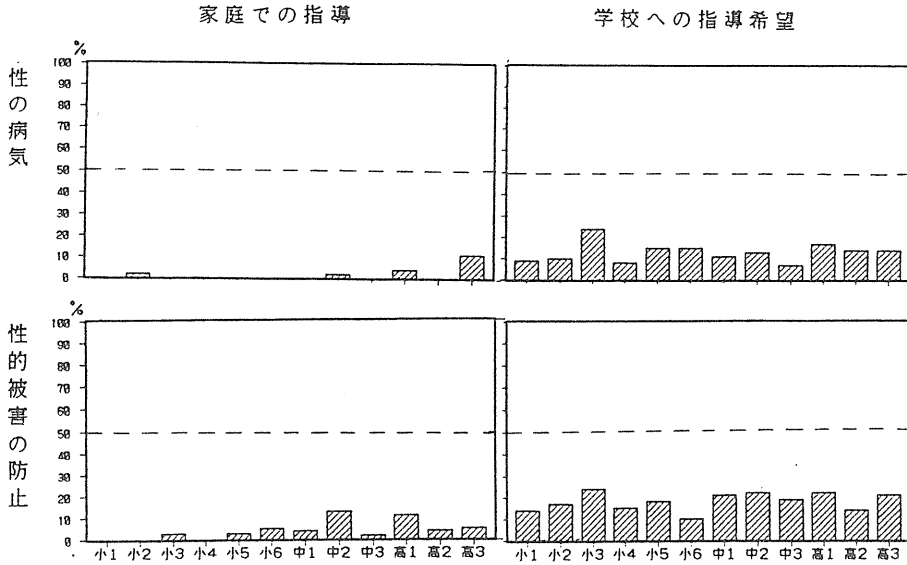


図3 学年によって傾向が認められた項目に関する学年別回答率（性に関する項目）

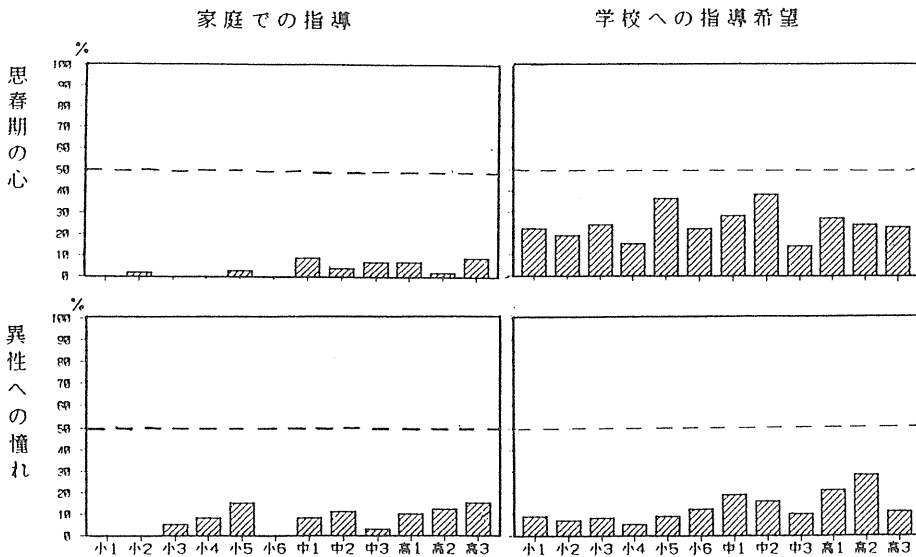


図4 学年によって傾向が認められた項目に関する学年別回答率（心理面に関する項目）

以上の結果から、性にかかわる諸事項に対する保護者の態度の特徴をいくつか読み取ることができる。最も注目されるのは、身辺自立に関する事項であろう。すなわち、この項目は児童生徒の学年の如何を問わず、保護者が非常に高い割合で家庭において指導にあたっており、とりわけ低学年の児童の保護者においてはその傾向が顕著であった。身辺自立は、精神発達遅滞児に共通した課題であり、高等部段階になると若干減少はするが、大半の保護者が共通して意識的に家庭でも指導していることがうかがえる。また、社会性に関する「公共的態度」や「身だしなみ」などの事項も家庭で指導していると答えた保護者の割合が多かった。これらの項目は、学年進行とともに家庭で指導する割合が上昇しており、身辺自立とあわせて多くの保護者が意識的に取り組んでいる課題と言えよう。これらの項目は、いずれもしつけという点からも重要な項目である。すなわち、小学部低

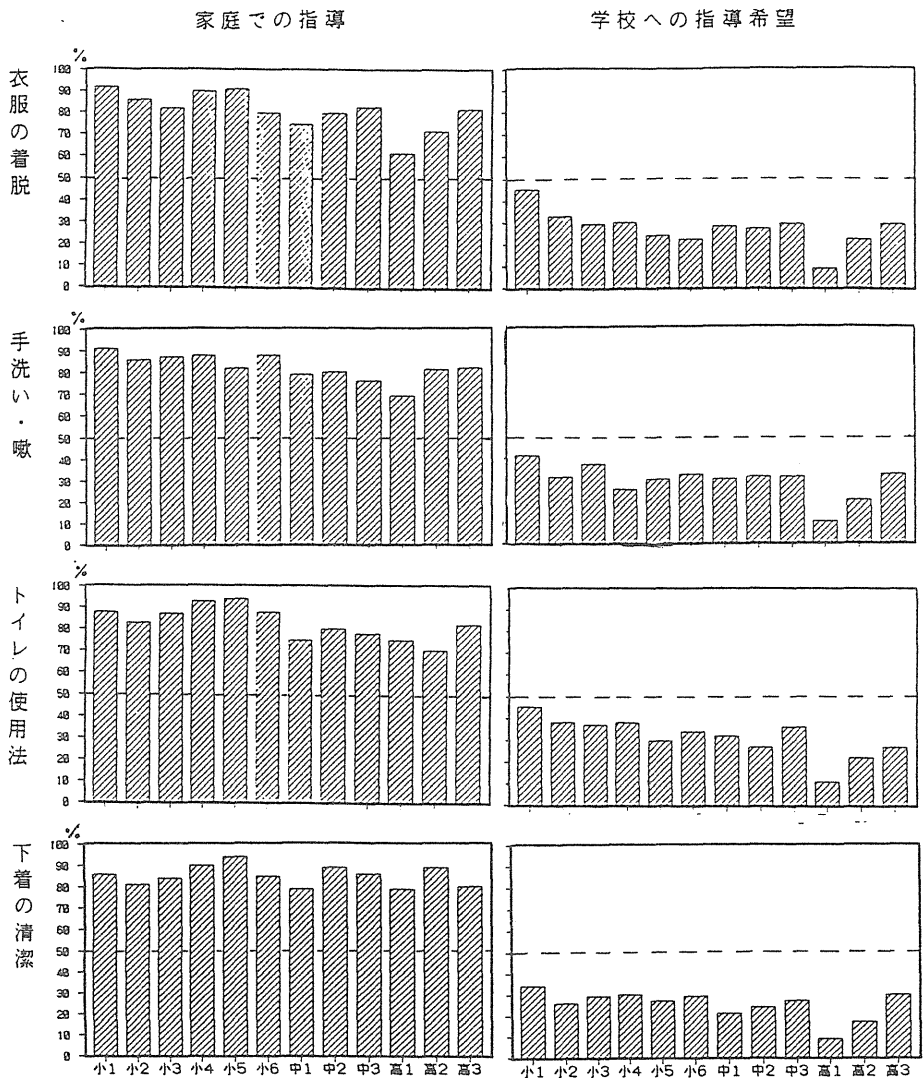


図5 学年によって傾向が認められた項目に関する学年別回答率(身辺自立に関する項目)



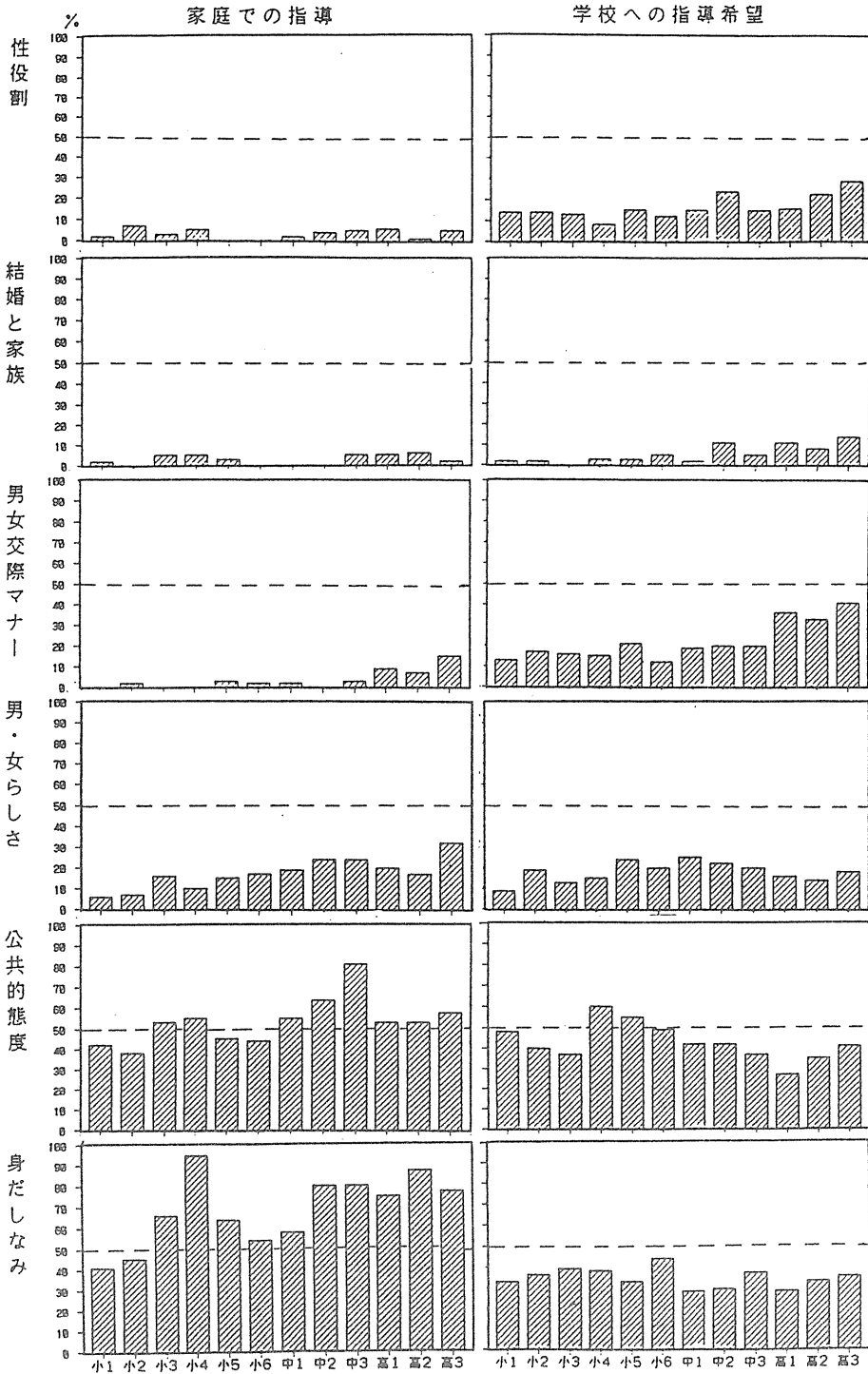


図6 学年によって傾向が認められた項目に関する学年別回答率（社会性に関する項目）

学年段階で身辺自立にむけた取り組みを大半の保護者が取り組みつつ、次第にしつけ第二段階とも言える「公共的態度」や「身だしなみ」など、社会生活をおこなっていくための必要事項を意識した取り組みが、家庭の中で増加するに至っている。

次に、学校に対する指導希望事項についてみると、家庭での指導状況ほど極端に高い回答率の項目はない反面、いずれの項目もある程度は学校での指導を希望する保護者がいた点に特徴がある。保護者にとって、学校での指導を希望する事項は多岐にわたっており、特定の項目には収斂していない。また、自由記述欄に「学校でどのような指導をしているのか分からない」という意見も多く見られたことから、保護者側が学校での取り組みについて必ずしも十分に周知していないことも、学校に対する指導希望内容が多岐にわたった理由の一つとして考えられる。一方で家庭ではほとんど意識的には指導されていない性や心理的な面に関する項目について、学校での指導を希望していることが特徴的に認められた。このことは、これらの事項について保護者は指導の必要性は認めてはいるものの、その具体的な意味や方法にとまどいを覚えるために、漠然と学校での指導を希望している可能性もある。さらに、個々の保護者の子どもの実態が多岐にわたり、障害の程度によっても学校での指導を希望する内容は左右されうる。本研究では、保護者からの回答と個々の児童生徒の障害との照合はおこなっていないため、この点についてはさらに立ち入った検討が必要とされよう。

## 謝 辞

本研究の実施にあたっては多数の精神薄弱養護学校ならびにそこに在籍している児童生徒の保護者から多大な協力を得た。また、本研究の遂行にあたっては茨城大学教育学部障害児生理学研究室諸氏の協力を得た。ここに厚くお礼申し上げます。

## 参 考 文 献

- 井上美園 全国性教育事情 「実践障害児教育」 254号 52-55 1994  
大井清吉・山本良典編 「ちえおくれの子の性指導」 福村出版 216 1990  
人間と性教育研究協議会編 「障害者・マイノリティの性と性教育」 あゆみ出版 64-72 1995